Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第4回 ジョン・スチュワート・レナルディ ブリティッシュヒルズ元儀典官

英国文化を代弁する責任を担って

～本物の英国文化を体現させるために～

日本国内にいてもイギリスと同じ環境で英語と文化を学べる施設を学生たちに提供したい。平成6（1994）年、神田外語グループはホテルを兼ね備えた国際研修施設「ブリティッシュヒルズ」を設立しました。日本国内で真のイギリスを体現する。そのコンセプトを実現するために、サービス部門のリーダーとして16年にわたり奉職した人物にジョン・レナルディ氏がいます。かつてない教育施設を実現するために、イギリス文化を代弁する大使として奮闘したレナルディ氏の体験をひもときます。
（構成・文：山口剛、写真：山口雄太郎 / 文中敬称略）

私は昭和25（1950）年にスコットランドのエディンバラで生まれました。寄宿学校から大学まではニューカッスルで教育を受けました。大学時代は反政府運動が激しかった。ヒッピームーブメントも盛り上がっており、ロンドンのハイドパークで何週間もキャンプ生活をしたこともあります。ハイドパークでは、ビートルズとローリングストーンズが一緒に出演したコンサートも見ました。

若い頃、私は警察官になりたいと思っていました。映画の影響です。でも、視力が弱かったので警察官にはなれないことが分かりました。次に関心があったのがシェフです。料理が好きでしたから。ただ、料理を作り続けるだけでなく、ホテル全体の経営を勉強したいと思うようになり、ニューカッスル大学では、ホスピタリティ・マネジメントを専攻しました。

大学を卒業するとスコティッシュ＆ニューカッスルというホテル会社に就職しました。シスル・ホテルズを展開している会社です。大学でホテル経営に関する学位を取得しましたが、入社すると清掃と皿洗いからスタートです。でも、これこそがホテル・ビジネスを学ぶ最善の方法なのです。

ホテルの現場では、いつなんどき、何が起きるか分かりません。管理職として指示を出しているだけでなく、自分自身で動かなければならないときがあります。そして、問題解決できたときこそ、部下の信頼を得られるのです。そのためには、さまざまな経験をして、ホテルの各部署の仕事ができなければならないのです。

スコティッシュ＆ニューカッスルに5年勤めた後、スター・インターナショナルに転職しました。ホテルに加えて、カジノやナイトクラブを経営する会社です。私は、建物や不動産の管理に関する担当になりました。競合会社が新規の出店をすると、対抗するために新たな施設を開業していきます。さまざまな契約、工事会社の管理、さらには現場のマネージャーにインタビューをしながら店舗運営が十分に行える体制を整えていくのも私の役割でした。

この会社には5年いて、その後、独立をしました。当時、イギリスはとても不景気だったので、倒産したホテルを再生する仕事をしました。ホテルの運営を軌道に乗せて、所有する会社が売却しやすくするのです。そんな時、ブリティッシュヒルズの募集広告に出合いました。平成6(1994)年のことです。（1/9）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第4回 ジョン・スチュワート・レナルディ ブリティッシュヒルズ元儀典官

英国文化を代弁する責任を担って

～本物の英国文化を体現させるために～

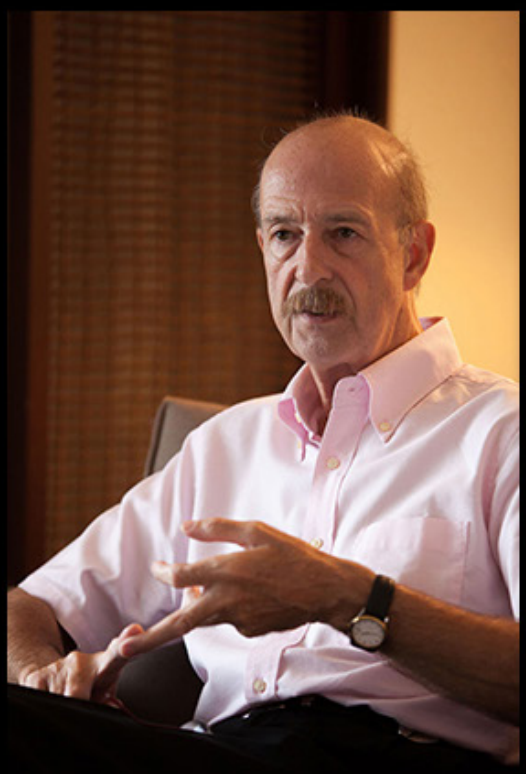
留学ができない学生たちのために
イギリスの文化と言葉を体験できる英国村を作る

広告には、「ホテルを兼ね備えた文化教育センターとしての英国村」が日本にできるとありました。とても好奇心をそそられましたね。すぐに応募をしました。役職は接客部門のマネージャーです。しばらくして、日本から、「ブリティッシュヒルズでの仕事にお誘いしたいのですが」と電話がありました。

電話の主は、ブリティッシュヒルズの教育部門の責任者であるダン・シモンズでした。私は「承知しました。お引き受けしましょう」と答えました。ブリティッシュヒルズへの参加は、私にとって新たな挑戦であるというだけでなく、私の人生においてまたとない体験になりました。

日本に到着したのは平成6（1994）年6月です。確か、開業の1カ月ほど前のことでした。建物はすでに完成しており、細部の仕上げをしていました。横浜港には続々と家具が到着します。多い時には15台のトラックが家具を運んできます。我々はトラックから荷物を降ろし、現在のリフェクトリーに運び込みました。そして、建物に照明器具を取り付け、家具を配置していきました。肉体的にはきつい仕事でしたが、非常に楽しかった。普通では体験できないことです。

実は日本に来るまで、ブリティッシュヒルズがどのような施設であるか詳細は知りませんでした。イギリスの文化と言葉を学びたい学生が飛行機に乗らなくてもバスや新幹線で訪れられるイギリス村を日本国内に作る。当時は航空券がとても高価でしたからね。



その実現のために、神田外語グループでは何年も前から調査を行い、ボーダーオークというイギリスの設計会社と契約を結んでいました。現地で樫の木材を調達し、建物を造って、解体して番号をふった部材を日本に運んで、もう一度、組み立てたのです。まるで巨大なジグソーパズルです。私は、ブリティッシュヒルズが、そんな壮大な計画であると、日本に来て初めて知ったのです。

ブリティッシュヒルズの建設は大林組によるものですが、ボーダーオークからはイギリス人の大工が派遣されていました。興味深いことがありました。イギリスの大工と日本の建築職人が交流する場面に遭遇したのです。

大工道具も日本とイギリスでは異なります。日本のノコギリには両側に刃を立ててあります。一方で、イギリスのノコギリの刃は片側です。イギリス人の大工は、「これはどう使うんだい？ずいぶんと早く、効率的に切れるじゃないか」と尋ねていました。両国の大工や建築職人の間には海を越えた協力と友情が生まれていました。そういった交流が生まれたのは、ブリティッシュヒルズがイギリスの文化を学び、忠実に建物を造ることに挑戦したからだと言えるでしょう。（2/9）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第4回 ジョン・スチュワート・レナルディ ブリティッシュヒルズ元儀典官

英国文化を代弁する責任を担って

～本物の英国文化を体現させるために～

真のイギリスを具現化するために
ブリティッシュヒルズへ集まってきた人々

ブリティッシュヒルズのオープニングに向けたスタッフの人選は完璧でした。

まず、館長であり、総責任者を務めたのは川田雄基氏。素晴らしい紳士であり、厳しい人でした。極めて率直な人物で、日本人よりも、ヨーロッパ人的でした。尊敬に値する友人です。三菱商事に長年勤めており、イギリスやヨーロッパの文化と歴史に関して深い造詣を持つ人物です。彼は日本に到着した私にブリティッシュヒルズのコンセプトについて熱く語ってくれました。

ブリティッシュヒルズでは、ここを真のイギリスにするためにバトラー（執事）を採用しました。イギリスでは規模の大きい家では必ずバトラーがいます。バトラーは家主の個人秘書であり、家庭内でのサービスを統括する責任者です。ピーター・スタンブリーです。とても技量のあるバトラーでした。彼はプロのバトラーの協会であるアイヴォー・スペンサーから派遣されていました。彼の大きな役割は、家主である佐野隆治理事長（現・佐野学園会長）とVIPゲストのお世話をすることでした。

フォルスタッフパブの責任者、パブリカンのビル・ブラウンも到着していました。ビルは生粋のロンドンっ子。ブリティッシュヒルズのパブは、田舎風の建物でしたが、彼はロンドンのパブを完璧に再現しました。フィッシュアンドチップスを出して、客をロンドンアクセントで「パンター」と呼ぶ。ライミング・スラング（押韻俗語）も使いこなした。電話（phone）は “dog and bone”、 階段（stairs）は “apples and pears”と言うのです。あくの強い人物でしたが、それぐらいの個性がなければロンドンでパブの主人など務まりません。

イギリスにいた私に電話をかけてきたダン・シモンズ、そして妻のベッキーもいました。彼らは教育の担当であり、ずいぶんと以前から神田外語グループで仕事をしていたようです。ベッキーは通称、鉄の女。クラフトハウスの教育担当です。何事にも極めて慎重に事前調査をして、強い意志を持って臨む人物です。

そして、モト（佐野元泰・現理事長）です。私にとって、彼は年の離れた弟のようなもの。ずいぶんと、一緒に遊びましたよ。

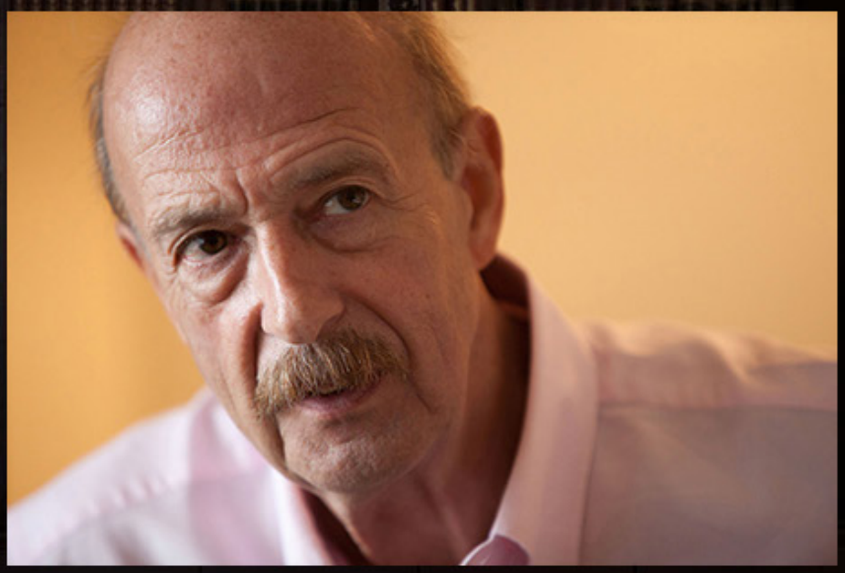
佐野隆治理事長には開業する1、2週間前まではお会いしていなかったと思います。彼がどんな人物であるかも知らなかった。彼はご自分のご両親が発案した「留学しなくてもイギリスの文化と言語を体験できる英国村」を責任を持って実現しました。イギリスに渡って自ら調査をして、プロジェクトを正しい方法によって導いていったのです。（3/9）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第4回 ジョン・スチュワート・レナルディ ブリティッシュヒルズ元儀典官

英国文化を代弁する責任を担って

～本物の英国文化を体現させるために～



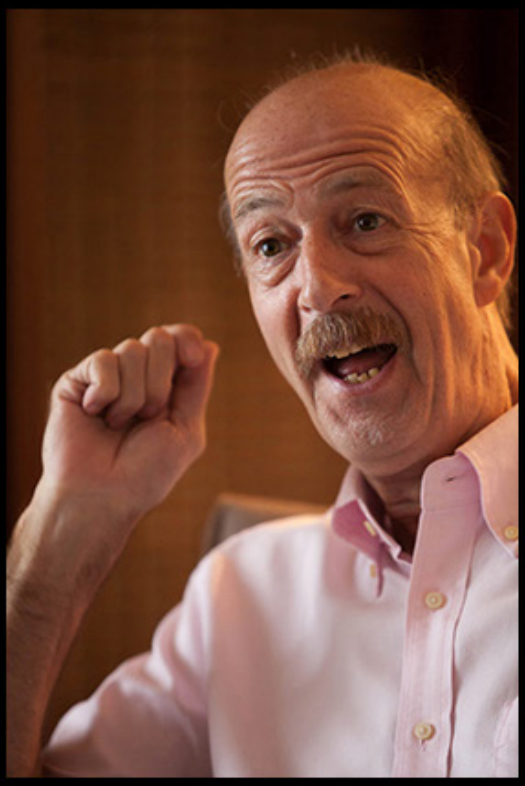
ロンドンの国会議事堂と同じ儀式で幕を開けたブリティッシュヒルズ

開業の直前、サービス部門のスタッフが到着しました。ホテル学校から派遣されたオーストラリア人たちです。彼らは「我々は、開業日までにすべてをマスターしなければならない」と言ってくれた。頼りになる連中です。家具の配置も終了し、いよいよブリティッシュヒルズのオープニングが近づいてきました。

オープニングのセレモニーに向けて、リハーサルを行いました。日本ではすべてを時間通りに進行させなければなりません。新幹線のようにね。

我々はイギリス的な儀式をオープニングに取り入れました。ロンドンの国会議事堂では、議会の開会と閉会の時に、「黒杖官」の男性が登場し、国会議事堂の扉を叩いて、女王陛下にドアを開くよう要求するのです（※1）。

そこで、我々も同じことをオープニングの式典ですることにしました。正面の扉はすべて閉じておく。バトラーのピーター・スタンブリーが扉をたたきました。彼が黒杖官の役を務めたのです。リハーサルでは、扉を閉じ、たたいて、内側からドアを開けました。完璧でした。



公式のオープニングの時が訪れ、VIPが到着し始めました。大使館関係者をはじめゲストの方々が続々と到着します。セレモニーはマナーハウスの前で行われました。テープカットが済むと、いよいよ黒杖官の登場です。マナーハウスの扉は外側に開きます。私はドアの内側で待っていました。ピーターがドアをたたいたら、扉を開く予定でした。

ピーターが扉をたたきました。私は扉を開こうとして押しました。しかし、床につっかかって扉が開きません。ピーターは扉をたたき続ける。でも開かない。みなさんに中へ入ってほしい。扉は新品でしたが、私はついに扉を蹴り飛ばしました。

扉は開きました。私はほっとしましたね。幸運なことに来賓のみなさんはすべてが儀式の一部だと思ってくれたようです。どうやら扉が膨張しており、開かなかったようです。とても愉快な笑い話です。翌日には営繕担当の山中さんが扉を削ってくれたので、同様の問題は一切起きませんでした。

ちなみに山中さんはとても不思議な人物です。誰も彼の過去を知りません。いつもは作業着でしたが、スーツを着ると女性が振り返るほどダンディな人物。私は彼にナイフとフォークの使い方を教えて、彼は私に箸の使い方を教えてくれました。山中さんは、我々が必要とするモノを必ず用意してくれた。でも、彼がどのように調達しているか、誰も知らなかったのです。（4/9）

1. ※1 黒杖官（Black Rod）：[英国の] 上院（the House of Lords）の官吏で、その主な任務は、議会の開会にあたって、年に1度の開院式の勅語（the Speech from the Throne）の儀式に出席するよう下院（the House of Commons）議員に呼びかけることである。（由来：この儀式に際して彼が持ち歩く、握りの部分に金のライオンがついた黒い職杖から）　出典：『英国を知る辞典（Dictionary of Britain）』（エイドリアン・ルーム著、渡辺時夫監訳　研究社出版　1988年）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第4回 ジョン・スチュワート・レナルディ ブリティッシュヒルズ元儀典官

英国文化を代弁する責任を担って

～本物の英国文化を体現させるために～

お客様にかつて体験したことのない最上の喜びを提供するのが我々の仕事

オープニングの式典では100人以上の来賓をお迎えしましたが、サービス部門のスタッフは18人しかいませんでした。その人数で、レセプション、給仕、パブ、プール、スポーツの全部門を賄わなくてはいけなかったのです。だから、開業後も大きな式典があると、ダン・シモンズやベッキーなど教育の担当者たちが料理や飲み物の給仕をいつでも手伝ってくれました。とても家族的なチームでした。ダンは給仕用のベストを着るのが大好きでした。

サービスと教育のスタッフは、部門の垣根を越えていつも協力し合っていました。サービスのスタッフは、テーブルマナーやワイン、ダンスといったクラスがあると、率先して協力しました。お客様に日本にいながらにしてイギリスにいるような楽しさを味わってもらうこと。我々はみな、その実現に最上の喜びを感じていました。

当時、ブリティッシュヒルズにいた外国人は、それぞれに長所もあれば、短所もあった。だからこそ、我々はファミリーになりました。日本人のスタッフも同じです。長所と短所を互いに補いながら、強い絆で結ばれていったのです。

私はサービス部門のマネージャーでしたが、他のスタッフと同じように現場で仕事をしました。テーブルサービス、シルバーサービス、ワインサービス、エスコート。チェックインの時は、マナーハウスから客室までお客様の荷物を運びました。冬になれば雪をかいたし、お客様が雪にはまってしまえば救助に向かいました。それが我々の仕事であり、役割でした。

自分がマネージャーであるかどうかなんて関係ありません。お客様への接客において、自分の仕事をするだけです。私たちがブリティッシュヒルズにいる理由は、お客様にかつて経験したことのないような最高の喜びを提供することです。それは、個人でいらっしゃるお客様に対してはもちろんですが、生徒や学生に対しても同じです。

私には接客に対する信念があります。接客とは仕事ではなく、情熱そのものなのです。接客業はとてもきつい仕事であり、情熱がなければこの仕事に就くべきでないと私は思います。接客とは天職であり、情熱そのものなのです。

最初の3年間は、お客様がとても少なかったです。佐野隆治理事長は神田外語グループの学生を送り込むと約束をしてくれました。学生は、1グループが120人程度です。学生の食事はリフェクトリーでのビュッフェです。個人のお客様には、フロアを見渡せる「ロイヤルバルコニー」にお席を用意しました。そして、次第にほかの大学や高校からも研修旅行が増え始めていったのです。（5/9）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第4回 ジョン・スチュワート・レナルディ ブリティッシュヒルズ元儀典官

英国文化を代弁する責任を担って

～本物の英国文化を体現させるために～

スタッフ全員がサービスを通じて、お客様の英会話とコミュニケーション力を引き出す

ブリティッシュヒルズでは、何のためにイギリスを再現するのでしょうか。最優先は学生です。イギリスで学ぶ経済的な余裕のない学生に、イギリスの文化を体験させるのです。

ブリティッシュヒルズは、おとぎの国です。日本におけるイギリスであり、飛行機に乗る面倒は必要ありません。新幹線やスクールバスでブリティッシュヒルズの門までたどり着けば、そこは別の世界への入口です。

マナーハウスまでは長い道が続きます。バスに乗ってマナーハウスが近づいてくると、学生は口々に感想を言い始めて、顔つきも変わってきます。私が学生たちを出迎えます。「ジョンさん、あなたはここに住んでいるの？」「そう、ここは私の家だから」。そう答えると学生たちは「私もここに住みたい！」と顔を輝かせます。

ブリティッシュヒルズでは、日本語の使用は禁じられていました。バスから降りれば、そこはイギリスです。スタッフは特に日本語を話さないよう厳しく命じられていました。学生たちに日本語を使わせないようにするためです。ブリティッシュヒルズに来てしまえば、学生たちは英語で話し始めるのです。

ブリティッシュヒルズでは、座学ではなく、活動をしながら英語を学んでいきます。一方的に教えられるのではなく、双方向にコミュニケーションをしながら学ぶのです。みんな、間違いながら学びます。それが学びの唯一の方法だと私は思います。日本人は英語を使うのを恐れています。でも、英語の環境に入れば英語で話すしかありません。英語の使い方を間違ったら、それを笑って、ジョークにしてしまえばいい。それが一番の勉強法です。

我々はサービス部門のスタッフですから、決して教師としてクラスで教えることはありませんでした。学生に教えるという職務はなかったのです。しかし、ブリティッシュヒルズでは、スタッフ全員でお客様を支援しました。我々は英語を使って話しかけ、お客様の英語を引き出し、サービスを通じて英語を教えるという役割を担っていたのです。

そして、私自身も日本人のスタッフ、年輩のお客様、そして学生たちからたくさん日本の文化や歴史を学びました。日本に来て学ぶまで私は日本がイギリスから大きな影響を受けていたなんて知りませんでした。鉄道、郵便、政府、道路、教育。日本で建設された道路が明治天皇の時代にイギリスから伝わったことなど考えてもみませんでした。（6/9）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第4回 ジョン・スチュワート・レナルディ ブリティッシュヒルズ元儀典官

英国文化を代弁する責任を担って

～本物の英国文化を体現させるために～

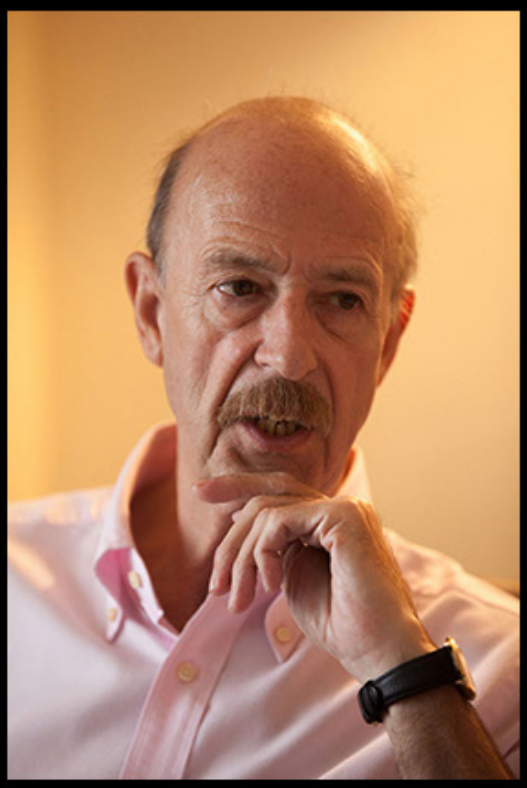
ブリティッシュヒルズでイギリスを具現化するのは、日本人ではなく、我々イギリス人の責任だった

我々外国人スタッフの責任は、ブリティッシュヒルズを真のイギリスにすることでした。とりわけ、イギリス人である私や、バトラーのピーター、そしてイギリス文化に精通した川田館長の役割です。だから我々はイギリス英語のアクセントで話したし、館内ツアーをするときは英語で説明をして、ジョークやユーモアも織り交ぜた。それがイギリスの文化ですからね。

川田館長、バトラーのピーター、そして私は、とても気の合うチームでした。我々は誰も、「私はボスだ」「私はバトラーだ」「私はホテルのマネージャー」だなんて主張しませんでした。我々はよく、イギリスの古いコメディを実演しました。川田館長は、イギリスの演劇にも造詣が深かった。

マナーハウスの2階へと続く正面の階段では、3人でダンスをしたこともあります。とにかく3人で楽しみました。ブリティッシュヒルズには、イギリスの文化を再現するのにうってつけの環境があった。我々3人は、「俺たちが死んだら、ブリティッシュヒルズに埋葬してくれ！」とよく言っていたものです。

クリスマスには演劇をやりました。シャーロックホームズです。スタッフは全員が出演します。ピーターはいつもホームズ役で、私は犯人役です。とても楽しかった。そして、新年になるとパーティーです。バグパイプを吹いて、ハギスを食べる。イギリスの風習をそのまま再現しました。



我々はみな、ブリティッシュヒルズの募集広告の文言を大切にしていました。そこには「イギリスの大使になりませんか？」とありました。我々はイギリスを代表する大使であり、ブリティッシュヒルズでイギリスを体現するのは我々の役目である。そう思っていたのです。日本でイギリスの文化を代弁する責任を与えられている。そんな責任を感じているイギリス人がブリティッシュヒルズに参加していたのです。とても素晴らしいことだと思います。

ですから、休みの日であっても、私は襟付きのシャツを着て、ネクタイを締めていました。ジーンズははかなかったし、短パンはテニスをプレイするときぐらいです。ブリティッシュヒルズはイギリスを具現化する。私はそのコンセプトに忠誠を尽くしました。我々がブリティッシュヒルズをイギリスにするのです。それが、我々がブリティッシュヒルズに存在する意義です。

開業当時、日本人のスタッフは裏方でした。我々外国人スタッフが前面に出て、日本人が支える。ブリティッシュヒルズをイギリスにする責任は日本人にはありません。日本人はイギリスを深く理解していないし、それは当然です。ここをイギリスにするのは、我々、イギリス人の責任だという自負がありました。（7/9）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第4回 ジョン・スチュワート・レナルディ ブリティッシュヒルズ元儀典官

英国文化を代弁する責任を担って

～本物の英国文化を体現させるために～

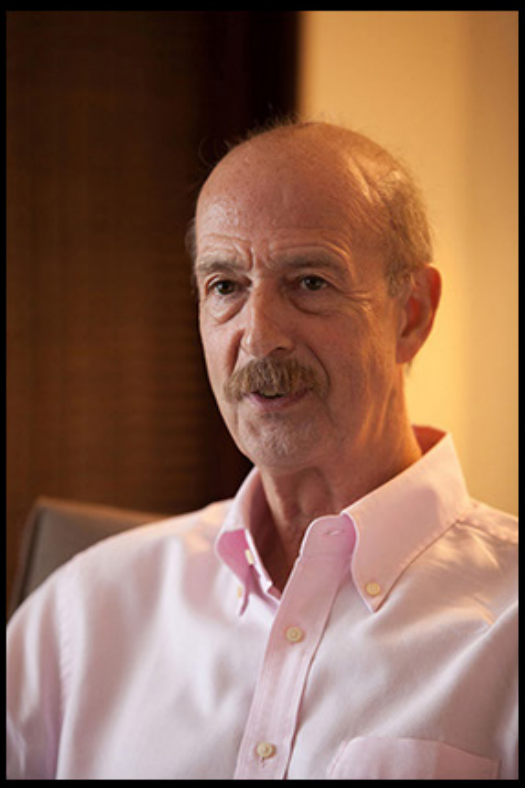
大使館の「ふるさと」になったことは ブリティッシュヒルズにとって光栄なこと

バトラーのピーター・スタンブリーは3年ほどでブリティッシュヒルズを去りました。その後、もうひとりバトラーが来ましたが、彼が辞めた以降、バトラーは置かれませんでした。

佐野隆治理事長は決めました。「ここにはジョンがいる。彼がやってくれる。問題ない」とね。実際、私とピーターのふたりで補いながらVIPの接客をしてきました。接客マネージャーだった私は、バトラーの役割を担いながら、プロトコル（儀典官）となり、イギリス大使のお世話も任されました。

ブリティッシュヒルズにいた16年間に5人の大使にお仕えしました。例えば、デビッド・ライト大使はとてもきちょうめんな方でした。車で白河駅にお迎えにあがります。ライト大使は車に乗り込むと、「ジョン、到着した。スケジュールはどうなっている？君の指示通り動く」と言ってくれたものです。私は大使の信頼を得ることができ、自身の責任を果たせました。

ブリティッシュヒルズではゴルフの「アンバサダー・カップ」も開かれました。ダイアナ妃が名誉総裁を務めていたピーターパン子ども基金の支援ができたことも光栄なことでした。イギリス大使館で大きな行事があると、そのイベントを開催する会場として選択肢に入るようになっていったのです。



いつしか、ブリティッシュヒルズは、イギリス大使館にとって東京から遠く離れた場所にある外部施設のような存在になりました。大使館にとっても「ふるさと」のような存在になったのです。そう認めていただけたことは、ブリティッシュヒルズにとってとても光栄なことでした。

イギリスの自動車メーカーのジャガーからも協賛を得ました。ジャガー・ジャパン社長のデビッド・ブルームという人物とご縁ができたのです。

彼に、「ブリティッシュヒルズの者です。ジャガーを1台ご提供願えませんか」と頼み込んでみました。最初のお願いは失敗しましたが、2度目の挑戦は成功して、その後、毎年、ジャガーXJSの新モデルを提供してくれるようになりました。ジャガーが車輛を提供するのは初めてのことだったようです。

ブリティッシュヒルズでは、マナーハウスの目の前にジャガーを置き、イギリス大使やVIPの送迎に使いました。興味のあるお客様には、ジャガーとはどんな車であるかを説明しました。ブリティッシュヒルズ、ジャガーの双方にとって利益のある企画でした。（8/9）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第4回 ジョン・スチュワート・レナルディ ブリティッシュヒルズ元儀典官

英国文化を代弁する責任を担って

～本物の英国文化を体現させるために～

コンセプトに忠実であることの大切さを ぜひ、思い返してください

私は、平成22（2010）年にブリティッシュヒルズを退職しました。平成6（1994）年に来日してから16年が過ぎていました。16年にもわたり、ブリティッシュヒルズに関わることを許していただけたこと、それ自体が名誉なことです。

佐野隆治理事長がオーナーでなければ、16年間もブリティッシュヒルズにいなかったことでしょう。理事長は、ご両親が始められたことに対して責任を持つ素晴らしい人物です。理事長にしても、やってきたことが実を結ぶことは満足感が得られたでしょう。私は理事長を尊敬します。

理事長は、人間の誠実さという真実を信じています。私は常に、理事長に対して常に率直であり続けました。理事長に尋ねられると、私は思ったことを率直に述べました。彼が私の答えを気に入るかなんて関係ありませんでした。私は、理事長には常に正直であり続けました。彼はボスです。そして、私が理事長の家族に対して抱いている気持ちを表現するのは難しい。極めて名誉なことです。

理事長はとても独創的です。彼は通常の日本人の経営最高責任者とは違います。彼に萎縮している人々をよく見ました。人々は彼に意見するのをとても恐れています。日本文化では上司に反論するというのは勇気のいることですからね。人々に恐れられるのは、敬意を払われていることの最大の現れですが、彼もまた人間です。彼は、私やあなたとまったく変わらない普通の人間なのです。

オープン当初と比べると、為替レートが円安になるなど経営環境が大きく変わっているのも事実です。スタッフも日本人中心へと移行しなければならないのでしょう。しかし、それではブリティッシュヒルズではなく、ジャパニーズヒルズになってしまう。我々が始めた伝統を継承し、今も、「これこそがイギリスだ」という気概を込めて仕事を続けていることに期待します。それがなくなっているとすれば、私はブリティッシュヒルズに戻って、言わなければならない。

「あなたがブリティッシュヒルズにいる存在意義は、真のイギリスを具現化することです。コンセプトに忠実であることの大切さをぜひ思い返してください」（9/9）

ジョン・スチュワート・レナルディ（John Stewart Renaldy）
昭和25（1950）年、イギリスのエディンバラに生まれる。ニューカッスル大学を卒業し、約10年にわたりホテルでの実務を経験した後、独立。平成6（1994）年に来日し、ブリティッシュヒルズの開業以前から接客部門のマネージャーとして参画した。在職中は、プロトコル（儀典官）も兼任。平成22（2010）年にブリティッシュヒルズを退職後、フィリピンに移住。現在はマニラの大学で観光学科の講師を務めながら、学生たちにホテル業の実務について教えている。